

大学生の遅刻・欠席行動のアセスメント

○道城裕貴*・松見淳子**

(*関西学院大学文学研究科) (**関西学院大学文学部)

key words : tardiness, absenteeism, self-monitoring, feedback

<はじめに>

近年、大学生の授業への遅刻 (tardiness)、欠席 (absenteeism) が問題となっている。応用行動分析の分野においても、会社や学校などの組織の遅刻、欠席行動を減らす試みがなされている。欠勤に対してボーナスシステムを用いて減少させた研究や (Landau, 1993)、ずる休みをする生徒に、様々な強化子 (パーティなど) を用意して出席を増加させた研究や (Barber & Kagey, 1977)、出席を記録するだけで出席率が上がった研究などがある (Shimoff & Catania, 2001)。本実験は、大学生の遅刻、欠席行動に対する pilot study であり、曜日や時間、内容が異なる2つの講義を履修する大学生において遅刻、欠席行動を観察、記録し簡単な介入を行った。

<方法>

実験日時、場所状況：2001年10月2日から2002年1月22日の間に、私立大学の教室にて行われた。

被験者：心理学の講義を履修した大学生 (男38名、女28名)。

「遅刻」とは、「授業開始時に指定の教室にいないこと」と定義された。授業開始時 (チャイムが鳴り終えた後) に2つの扉を閉め、扉の前に観察者が立ち遅刻者に対して名前と学籍番号を聞いた。観察者は、常時二人であった。「欠席」とは、「授業時 (90分間) に指定の教室にいないこと」と定義された。授業終了5分前に、講義担当者が出席カードを配布した。公欠、病欠など理由がある場合は、書類提出、もしくは電話連絡をするように教示した。

デザイン：マルチプルベースラインデザイン across situation

手続き：クラスAは、火曜の3限で第1週から第3週がベースラインで第4週から第13週が介入であり、クラスBは、金曜の1限で第1週から第5週がベースラインで、第6週から第11週が介入と実験者が任意に決定した。またベースライン時に、遅刻行動についてのアセスメント用紙を配布した。

ベースライン 介入前の遅刻、欠席行動を記録した。

介入 出席点及び遅刻点を与え、セルフモニタリング

(self-monitoring)、グループフィードバック (group feedback) を用いた。

出席点及び遅刻点：学期成績100点満点中10点であり、遅刻1回につき0.5点、欠席1回につき1点を減点していった。

セルフモニタリング：出席カードに「今日、遅刻をしましたか?」と書いてあり、その問いに「Yes」と答えた人に「何時に入室しましたか?」「遅刻をした理由は何ですか?」という問いにさらに答えさせた。

グループフィードバック：講義当日の遅刻者数を黒板にて発表し、授業の終わりに講義担当者に「以後、遅刻、欠席に注意するように」と教示してもらった。その際、前週の遅刻者、欠席者も発表した。

<結果及び考察>

本実験はマルチプルベースラインデザインを用い、2つのクラスを履修する被験者に介入を行った。クラスAは、3週間のベースラインの後に遅刻者の減少が見られた。クラスBでは、介入が始まった6

週目から減少が見られた (Fig.1参照)。セルフモニタリングの結果によると、97%の被験者が、両クラスで正確に自己の遅刻行動の有無を記録した。誤差は、平均2.2分 (範囲0~15) であった。介入期では、遅刻、欠席者は、0回の被験者が最も多く、2回以上の被験者は5人前後であったため非常に少なかったといえる。また、全講義の半分以上を遅刻した遅刻常習者は、両クラス合わせて4人であった。遅刻は両クラスにおいてベースライン時より減少していた。クラスAでは、平均遅刻回数が52%減少し、クラスBでも52%減少した。しかし、時期 (e.g., 土曜の補講) による変動が見られた (Fig.1参照)。また平均遅刻時間は、クラスAでは53%増加し、クラスBでは42%増加した。欠席は、ベースライン時に比べて増加した。クラスAでは平均欠席回数が44%増加し、クラスBでは3%増加した。最終的に、クラスAの学期成績における平均出席点は8.1点、クラスBは7.4点であった。

Fig.1では、遅刻者数が減少しているにもかかわらず遅刻時間が増加している週がある。そこで、遅刻行動の先行条況 (antecedent)、などに関するアセスメントの結果を見ると、「寝坊」など前の晩に関する事が多く、その週特有のイベントは報告されなかった。そのため、個別に原因があるのだと考えられる。遅刻常習者4名の答えも同様のパターンであった。

大学生の遅刻、欠席行動の変容はセルフモニタリングやミニマムな減点法では、5%程度の遅刻常習者の行動変容効果は薄く個別対応が必要かもしれない。また、補講、テスト前などの時期の他に、個々の生活状況などに支配されることが示唆された。

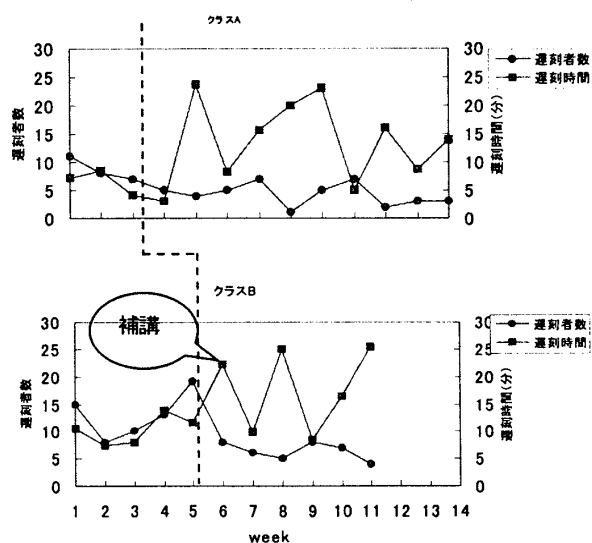


Fig.1. クラスA, Bの遅刻者数と遅刻時間 (分) .

(DOJO Yuki, MATSUMI Junko)